

ボードインの来日とその意義

石田純郎

A・F・ボードイン (Antonius Franciscus Baudin 一八二〇～一八八五) は、一八六二年 (文久二年) に来日し、長崎、大阪、東京で教え、一八七〇年 (明治三年) に日本を去った。従来ポンペの影に隠れ、彼の日本での活動は注目されていなかった。しかし現在に至る日本の医学教育に与えた彼の影響には、意外に大きいものがある。本日は、ボードインの来日の意義と、その後の日本の近代医学に与えた影響について、簡単に述べる。

ボードインは、オランダのドルドレヒトの実業家 Franciscus Dominicus Andreas Baudin の第五子 (九人兄弟、長男) として、一八二〇年六月二十日に生れた。一八三九年一月十五日、ウトレヒト大学医学部に「入学登録」を行い、同年八月二十日、ウトレヒト陸軍軍医学校へも入学し、四年後に後者を卒業した。一八四三年八月二十二日に、オランダ陸軍に入隊、同年十二月四日に、グロニンゲン大学に「入学登録」を行い、一八四五年六月二十一日に「上顎切除に関する研究」で、医学博士号を取得して、「卒業」した。

一八四七年十一月三十日に、ボードインは二等軍医に昇進し、この年彼はウトレヒト陸軍軍医学校の教官となった。この学校で彼は来日までの十五年教官として働き、この間生理学、外科学、眼科学の教科書を執筆した。同校のカリキュラムは、学年制・時間割がきっちり定められ、選択のないものであった。それについては演者はすでに検討を行った。当時オランダには、四種の医育機関が存在した。それは程度の高い方から、大学、アテナア、軍医学校、クリニカル・スクー

ルであり、一八六五年の法律により、一八七七年までに医育機関は大学に一本化された。一八二二年に設置されたウトレヒト陸軍軍医学校も、この法律により、一八六八年にアムステルダムに移転し、一八七七年に廃止された。

ポンベは安政四年（一八五七）から長崎で、ウトレヒト陸軍軍医学校式の系統的かつ近代的医学教育を敢行し、それは成功した。その後任として、ボードインが文久二年九月六日（一八六二年十月二十八日）に長崎へ渡来した。そして慶応二年（一八六六）秋のマンズフェルトの渡来までの三年半の間、長崎の医学校でポンベより高度の医学教育を行った。

慶応元年（一八六五）四月、長崎養生所は精得館と改称したが、ボードインはこの時幕府に要請して、物理学・化学を独立させ、養生所内に医学所とは別の分析研究所を併設することを求め、その教師として、かつてのウトレヒト陸軍軍医学校時代の同僚ハラタマを二人目の教師として招くよう計った。同年分析研究所は完成し、翌年三月三日（四月十七日）、ハラタマは到着した。

またボードインは、江戸にオランダ系の軍医学校の創設を、慶応元年末（一八六六年はじめ）頃より画策しはじめた。結局慶応三年五月十日（一八六七年六月十二日）、江戸の医学校の開設について、七箇条の約定書を幕府とオランダ側が結ぶことで結着した。

更にボードインは慶応二年（一八六六）、日本人医学生（緒方惟準、松本銈太郎）のオランダ留学を計画し、幕府と交渉、許可を受けた。

江戸の医学校の開設準備、日本人学生の留学援助の目的で、慶応三年五月下旬（一八六七年六月下旬）ボードインは日本を去り、約二ヵ月後にオランダに到着し、緒方、松本の両名をウトレヒト陸軍軍医学校に入学させた。ボードインは、ロンドンのサマリタン病院の婦人科・小児科で新しい防腐法、卵巣剔除術を学ぶなど、新知識、新技術を身につけ、また医療器具類を整えて日本へ送った。

ところが、ボードインの欧州滞在中に江戸幕府は崩壊、政権は明治新政府に移り、ボードインの立場、そして江戸のオ

ランダ系の軍医学校創設の契約は宙に浮いた。また緒方、松本の二人も予定をくり上げ帰国、緒方は大阪の仮病院の院長に赴任した。ポードインも明治二年二月（一八六九年三月）、ここに就職した。大阪の仮病院は、既にハラタマが就職していた舎密局等と共に、明治新政府により大阪に設置されるはずだった大学の核となることになっていた。しかしその計画も中止された。大村益次郎の遺言により、大阪の陸軍病院が明治三年（一八七〇）二月に正式発足し、ポードインはここに移り、診療と軍医教育を行った。同年六月帰国のため、大阪陸軍病院を辞した。そして書物を全て本国へ送り返して横浜に滞在中、折からの普仏戦争のため到着が遅れていた二人のプロシア軍医の代りに、明治三年七月から十月まで、大学東校で教えた。

この時に、上野公園の設立に彼がかかわったという「お話」が生まれ、その結果、昭和四十八年に上野公園にポードインの銅像が設置されたが、オランダ側のミスのため、顔が弟のものとすり変ったままとされている。明治三年閏十月末（一八七〇年十二月）に、ポードインは日本を去り、一八七三年三月十六日にオランダ陸軍に復職した。

さて、一八五七年（安政四年）から一八七七年（明治十年）までに、ポードイン、ポンペを含め十四名のオランダ医が渡来し、長崎、熊本、岡山、神戸、大阪、京都、金沢、新潟、横浜、東京の医学学校で教えた。この内十名が、ウトレヒト陸軍軍医学校の卒業生であり、ポードインの教え子であった。残った四名の内二名も、来日前からポードインの知己であった。三名は新潟に渡来したオランダ医であるが、彼等は一八七四年（明治七年）から一八七七年（明治十年）と、比較的遅く来日し、非ウトレヒト人脈で異質である。一八七一年（明治四年）迄に来日した十一名の内、十名までがウトレヒト陸軍軍医学校卒であった。

ポードインの影響下、これらの軍医が組織的に日本に来日し、日本の医学教育を、ウトレヒト陸軍軍医学校式に行なおうとする意図があったと考えられる。折から、一八六五年の法律により、ウトレヒト陸軍軍医学校の廃校は決定的になつており、同校の日本での延命という意味もあったかもしれない。

そして来日オランダ医の大半は、日本各地で実際にウトレヒト陸軍軍医学校式の教育を行った。これは例えば、日本のこるオランダ医による解剖学講義録、その多くがウトレヒト陸軍軍医学校用テキストであったフレスのものであること(三)により証明される。

明治二年（一八六九）、明治新政府は医学の範をドイツにとることを決め、明治四年（一八七一）、二人の軍医、ミューラーとホフマンが東校に着任した。二人は、プロシア陸軍軍医学校（愛称ペビニエール）閥の人材であり、この時受け入れたカリキュラムも、ペビニエール由来のものであった。

医学教育のモデルとなる国がオランダからドイツに変わっても、軍医学校をそのモデルとした点には変りはなかった。その理由は、第一に、軍医は日本の武士階級に相当する高い身分と考えられていた事、第二に人材の促成栽培のためには、大学のように学生に教科選択の自由を与えたシステムより、管理者がカリキュラムを決め、各学期に配当された全教科の必修を必要とするシステムが適していた。また日本人が軍医学校を大学と勘ちがいていた事もある。幕末にウトレヒト陸軍軍医学校へ留学した緒方惟準は、「大学で学び」と記録している。ウトレヒト及びプロシアの陸軍軍医学校が、アカデミアと当時彼地で呼ばれていたのは事実である。現在の日本の国語辞典でアカデミーは「大学」と説明され、英語辞典では「専門学校」と説明され、専門学校と大学との混同は今なお存在している。大正七年（一九一八）に施行された新大号令により、大正八年（一九一九）から大正十二年（一九二三）の間に、十二校が医科大学に昇格した。それらは長崎、熊本、岡山、金沢、新潟、千葉（以上官立、旧六）、大阪、京都府立、愛知（以上府県立）、慶応、慈恵（以上私立）、北海道（以上帝大）（*はかつてのオランダ系の医学校）この内、旧六と府県立の計九医大の内七医大までが、かつてのオランダ系の医学校で、特に田舎に設置された医大の大半がそれであった。

明治十一年から二十年の間の医学校ブームで、全国二十六〜四十八校を数えていた過剰な医学校を減少させるため、明治新政府は明治二十年、地方税をもって医学校の経費を支弁してはならないとする勅令（第四十八号）を出し、医学校整

理を計った。その結果、医学校数は明治二十一年には十三校となった。この際意図的に、かつてのオランダ系の医学校が残された。当時アメリカ系、フランス系、イギリス系等の多彩な医学校があったが、それらは全て廃止された。そして明治二十一年に残された医学校が、大正七年の新大学令により、医大に昇格したのである。

現在の日本の医科大学では、カリキュラムが硬直的で、選択の余地が殆んどない。また欧米では大学が大学であるための要件とされている、医学哲学、医学史の研究室がない。これらは日本の医科大学が、オランダでは一八七〇年代に、ドイツでは一九一〇年代に廃止された軍医学校のシステムを、その胎生期に模倣した一つの影響であろう。

文献及び註

(一) 「入学登録」「卒業」 当時のオランダの大学には、学生が自由に選択できる講義群があり、学生はそれを聞くために、まず「入学登録」を行う。そして所定の単位を修め、研究をまとめ、論文防禦に成功して、「学位」を取って「卒業」するわけで、今の日本の大学のように、定められたカリキュラムや学年制があったわけではなく、もっと自由であった。学位は卒業の要件で、この点は現在の大学院に類似している。

(二) ウトレヒト陸軍軍医学校のカリキュラムは、拙著『蘭学の背景』思文閣出版一九八八、及び『江戸のオランダ医』三省堂一九八八、で詳述した。

(三) 石田純郎「フランスの解剖書を使った幕末維新の解剖学講義について」『適塾』十八号、十五～二十四頁、一九八五

その他の参考文献

石田純郎「ボードインと幕末維新のオランダ医たち」『日蘭学会会誌』九卷二号、一一三～一三六頁、一九八五

石田純郎「ハルム・ポイケルス 西洋医学教育システム受容の歴史」『医譚』七十二号、一五～二二頁、一九八七

(三菱水島病院)